

9月9日(土) ワークショップ1 第3室(2114)

分野/Field: Curriculum

国際理解(グローバル) 教育研究会企画

**持続可能な開発のための教育と多様性をはぐくむ英語教育**  
**Education for Sustainable Development and diversity in English Teaching**

司会・提案 浅川 和也(東海学園大学)

kasan@mac.com

提案 三浦 幸子(都留文科大学)

HQM13275@nifty.com

**国際理解(グローバル教育) 研究会の視座**

国際理解(グローバル教育)研究会では、社会的問題を深める英語教育のあり方についてユネスコなどの視点から構想し深めている。全国大会において、社会的問題をテーマとした映画や英語の歌(ポップス)をどうあつかうか、またユネスコの世界遺産に関する教材やコンフリクト・リゾリューションについてのワークショップもおこなった。また環境やジェンダーをテーマにしたシンポジウムもおこなってきた。地域にねざすという点では、沖縄大会では沖縄を題材にした英語教材および映画「教えられなかった戦争・沖縄編」の英語版制作に英語教師がかかわった活動を、北海道大会ではアイヌ民族やエコロジーの視点を大会開催地にちなんでとりあげた。近年、テキストの内容には社会的問題が多くとりあげられるようになった。ESPとまではいかないまでも科学や健康など特定な題材を英語で学ぶこともめずらしくはないが、グローバル教育では内容と方法の統一を基本とする。人権の実現をめざすのであれば、人権について学ぶとともに、一人ひとりを大切にする仲間づくりができるよう授業のなかで、さまざまなインタラクションをつくるのである。国際理解の基本は国をこえて一人ひとりを尊重することにある、そのような多様性の理解と尊重は、ユネスコを中心とするあたらしい教育の流れでもある。多様なものの見方をはぐくむ教室実践にそのような国際的な潮流が反映をみることができる。

**提案I: 多様なものの見方をはぐくむ授業実践(三浦幸子)**

文化的ものの見方の違いについては、英語教育のなかでもとりあげやすい話題である。それは、価値観や感じ方の違いから生じる誤解がコミュニケーションの大きな障害となるからだ。目に見える差はわかりやすく誤解もとけやすいが、歴史の解釈や文化的背景が根本にあ

る価値観の差はとらえにくく、さらには、そのような誤解が重なると、偏見や誤った固定観念(ステレオタイプ)につながる危険もある。そこで、英語教育においても、価値観の相違を生む文化的背景を知識として与えるだけでなく、状況に応じて疑問を投げかけ、固定観念にとらわれない見方をつくる段階まで目指すことが、よりよいコミュニケーション能力を育成するために必要であると考え。これは、国際理解教育の目的の1つである「共感(empathy)」、すなわち、他の考え方、感じ方を理解、尊重する多様なものの見方をつくることとも重なるだろう。そのためには体験レベルの学習が必要であるが、それは通常の教室授業においても可能であろうか。

本発表では、集団的ステレオタイプ(common misconceptions)に焦点をおいた英語授業例を具体的な資料(教材、活動例、生徒のビデオなど)を用いて紹介し、国際理解教育の実践について検討したい。

## 提案Ⅱ：持続可能な開発のための教育とのかかわり(浅川 和也)

ユネスコは国際理解すなわち人権や環境、開発、平和の課題にあらゆる教科でとりくむよう勧告している。さらに2005年からは「持続可能な開発のための教育10年(ESD, Education for Sustainable Development)」がはじまった。日本では外務省と環境省、文部科学省が所轄になっている。一般に持続可能な開発というと環境問題との関わりが想起されるが、文部科学省のホームページではESDを「環境、福祉、平和、開発、ジェンダー、子どもの人権教育、国際理解教育、貧困撲滅、識字、エイズ、紛争防止教育」とひろくとらえ、「自らの考えを持って、新しい社会秩序を作り上げていく、地球的な視野を持つ市民を育成するための教育」「人権教育、異文化理解、男女共同参画社会の構築、環境教育の推進」をすすめるとする。事業例として『英語が使える日本人』の育成をあげられているのは、英語教育が持続可能な開発に貢献するという見解からであろう。しかし多文化理解をすすめるのには英語が使えるということ以上に、英語を学ぶことによってより多様なものの見方をはくくむことが重要だと考える。

ユネスコは「21世紀教育国際委員会」において、知ることの学習(Learning to know)、行うことの学習(Learning to do)、共に生きることの学習(Learning to live)、人間となる学習(Learning to be)という教育の4つの柱を示した。これらは人びと社会の関与をつくり、知識を行動にむすびつけるグローバル教育への視座と同じである。

ワークショップでは授業実践事例から、ESDへの展開をふまえて、多様なものの見方をはくくむための英語教育をどのようにすすめるかについて論議を深める。